

一言私にも仰有つて下さればいゝのに、口の短い人達だ。私知らないでゐて、眞正に好い耻を搔く所だつたわ。おばあさんは姉さんでも雪子さんで、餘りお好きぢやない。異人さんの胡弓を肩に乗つけて弾くのが何程お上手でも、一つ身さへ碌すつ法縫へない人を貰つたのぢや些つとも家の多足にならないつて仰有つてゐなされる位だから、雪子さんを貰ふ事は反對かも知れない。けれど兄さんも姉さんも私も雪子さんが大好きだから仕方がないわ。それにお父さんは萬事お母さん委せで、お母さんも彼の子ならと仰有つてゐなされる。

雪子さんは夕方までお談話をなすつた。お母さんは立關まで、姉さんと私は御門まで送つて行つて、姉さんが、

『眞正に明日は上られませんか。』  
と又斷ると、

『いけませんよ。一端お約束なすつて置いて、お出にならなければお迎へに上り

ますから、然う思つてゐらしやい。』

『ひどいわねえ。もう姉さんだと思つて人を壓制して!』

『ようムいますよ。』

と雪子さんは赤くなつてお歸りになつた。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

『もう五百頁になつたよ。』

と兄さんが仰有つた。

『一體何時出るんだい? 君の傑作も最早長いもんぢやないか。』

『此年中はかゝるね。』

『出たらば嚙浴陽の紙屑買を泣かせる事だらう。』

と東益さんが笑つた。紙屑買は奈何だか知らないけれど、兄さんは是が出てから



雪子さんに婚約指輪を買つて上げるのださうです。全く一生懸命よ。お菊は此間彼の反古でハタキを拵へて、もう少しで兄さんに擲られる所でした。

\* \* \* \* \*

兄さんも東益さんも學校が暑中休暇になつたので富士登山にいらつしやつた。兄さんは富士は眺めるもので登るものぢやないといふ長い御持論で、富士山の麓に生れた癖に未だ一度も登つた事がない。東益さんが頻りに勧誘したら、はい、もう明治生命の方へ入つてゐますからお断り致しますなんて御冗談を仰つた。けれどもお婆あさんは富士へ一度登らぬ馬鹿二度登る馬鹿といつて、昔から男は一度はお山登りをする事に定つてゐる。お前も身固めをする前に一度淺間様へお詣りをしてお出で、私が紹介状を書いてあげるからと東益さんに加勢をした。すると兄さんは實は僕も一度登りたいと思つてゐるんだけれど、餘り富士登山が流

行るから癪に障つて厭になつた。僕は自分が爲やうと思つてゐる事でも、流行り出して猫も杓子もやるやうになると、何だか厭になつて了ふと、本音をお吹きになつた。何といふあまのじやぐでせう。矢つ張り肥厚性鼻炎の所爲か知ら。

其は兎に角として、今朝おてんばの宿屋にてといふ失形な富士山のエハガキが姉さんの許へ着いた。人を馬鹿にしてゐる。お婆あさんのお頼みの銀明水は決して忘れないから安心するやうにいつておくれ。末筆、机の上の盆栽は借り物ゆゑ龜子に折られぬやう殊に御警戒下され度候と候文で又私を馬鹿にしてゐる。覺えておいでなさいよ。

私は富士山へ登るなんて、那麽おてんばはしたかないけれど、避暑に行きたい。お母さんは行く筈だつたけれど、龜子と一緒にぢや目が放せなくて、態々心配を求めに行くやうなものだから、折角の保養が保養にならないつて考へてゐるなさる。姉さんは先頃までは鉛筆のお稽古さへ出来れば、避暑なんか如何でもいゝやうな



お顔をなすつてゐるけれど、東益さんはお國のお母さんが是非と仰有るので是非  
歸省しなければならなくなつたので、急に避暑論者になつて、毎日お母さんをせ  
びつてゐなされる。

『龜子の事は私が引受けますから。ねえ、いゝでせう。』

『お前のお引受は根つから信據にならないからね——第一海つてものが近くにあ  
りますから、些つとも目が放されません。』

『でも龜子は遊けてよ。』

『游けるから危いのです。去年なんか彼の裏の山の松の木へ上つて了つて、下り  
て来るまで私は甚麼に心配したか知れやしません。』

と未だ今の所では海の物か山のものか分かりません。次郎さんの方も此處二三日の  
形勢で行かれるか行かれなしか定るさうです。平常勉強してゐないと試験の時に  
困ると申しますが、全く平常音なくしてゐないと、避暑の時に困つて了ふ。

東益さんは今日御郷里へお歸りになつた。兄さんと姉さんと私は上野の停車場  
へお見送りに行つた。

『君可成早く歸つて來給へよ。』

と兄さんが仰有ると、東益さんは、

『豫定通りに歸つて來るよ。さあ、シエクハンドしやう。』

と窓から手を出して、兄さんから姉さん、姉さんから私といふ双六をした時の順  
で握手をした。其中に汽車がポーつて音を立てた。私は次郎さんに抓られた時の  
やうな心持になつた。

『別れるなあ悪いもんだな。眞正に早く歸つて來給へよ。』

けれども青森行はおいらの所爲ぢやないよとも言はずに、少し宛動き出して、



東益さんのお顔は暗の中へ消えて了つた。

姉さんは家へ着くまで何にも仰有らなかつた。家へ着いても唯鷺のやうに考へ込んでゐなすつた。さうして雨が降り始めて、ゴロ／＼様が鳴り出したら、

『もう東益さんは餘程行つたでせうね。』  
と仰有つた。

『大分行つたらう。』

と兄さんがお答へになつた。

『兄さん／＼、東益さんのお國何處？』

と私が訊いて見たら、兄さんは唯、

『山形縣。』

と仰有つた。

『山形縣て何處？』

と訊いたら、

『東北。』

と仰有つた。

『東北つて什麼ところ？』

と訊いたら、

『二十世紀文明の今日に飢饉のある處さ。』

と仰有つた。上野でさへ那麼に暗いのだもの、東北は什麼に暗からうと私は又東益さんのお顔を思ひ出した。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

うれしく、私避暑に行くのよ。お母さんと姉さんと雪子さんと。お母さんに御心配をかけないやうにと、お父さんからもおばあさんからも、くれ／＼も言



ひ聞かされたから、私は種々のお約束をした。汽車が行き違ふ時に届くかと思つて蝙蝠傘なんか出さない事、停車場停車場で無暗に下りてお世話を焼かせない事、トンネルへ入つた時に非常報知機を引張つたりしない事、先方へ着いたら今度は姉さんが海水浴をしてるなざる間に脱いであつた着物を着て寫真なんか寫しに行かない事、汽車の音が聞えるかなんと思つて線路に耳を當てない事、最早姉さんの指輪を漁師の子にやらない事、舟に乗らない事、木に登らない事、星月夜の井戸には眞正に星なんかないのだから餘り覗いて見ない事、片瀬饅頭を餘り喰べない事まで、都合一ダースばかり約束して了つたから、當分は動きが取れません。で、汽車の中は無論の事、先方へ着いても、最早私決つておてんばははしない積りです。

### お轉婆娘日記終

大正六年六月十二日印刷  
大正六年六月十五日發行

(正價金七拾錢)

複製不許

譯者 佐々木 邦

發行者 江藤 邦 松

印刷者 高橋 郁

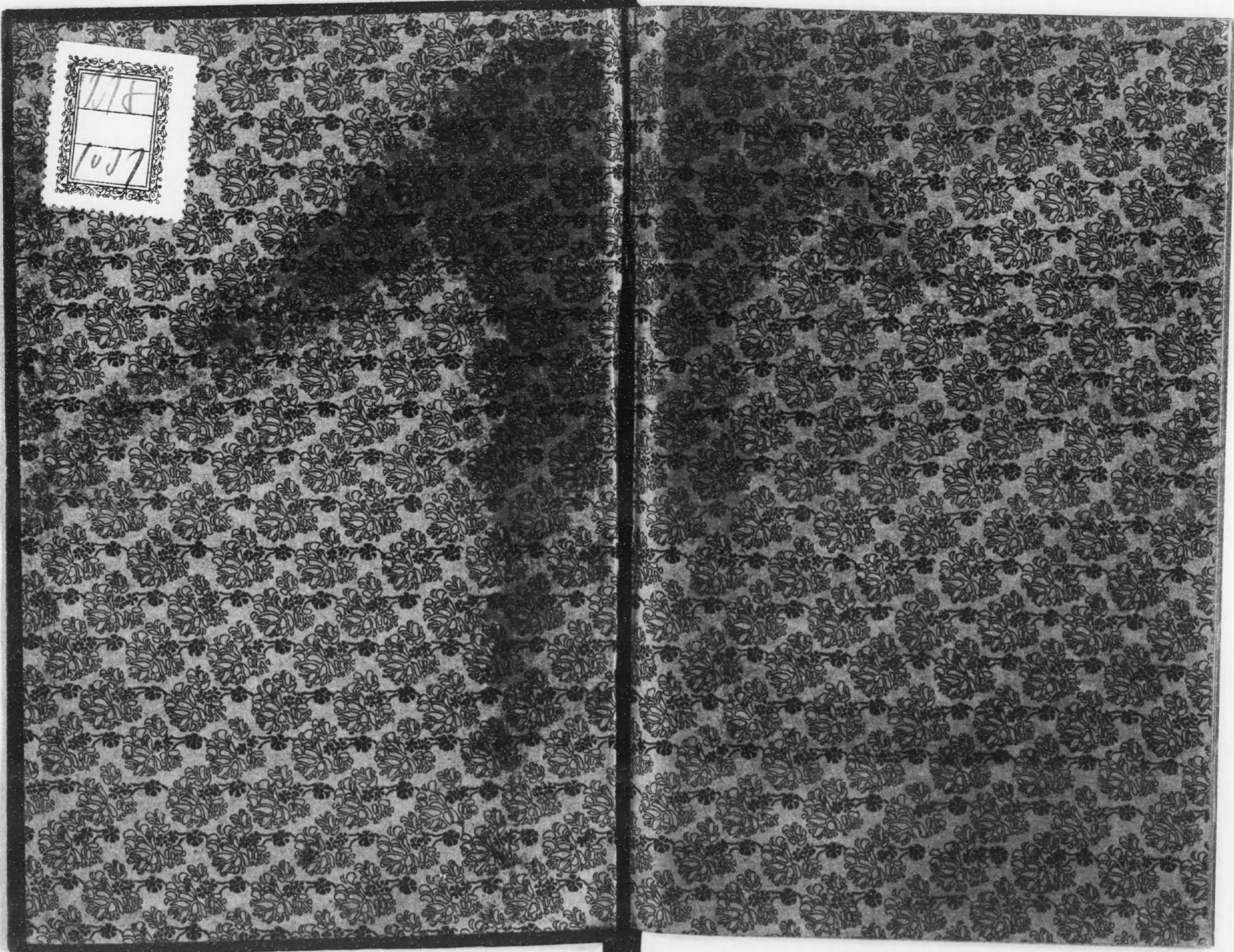
東京市日本橋區檜物町廿六番地  
東京市京橋區弓町二十五番地

發行所

東京市日本橋區檜物町  
振替東京二二〇番  
弘學館  
大阪市東區淡路町五丁目  
振替大阪九九〇八番  
金正堂



118  
1037





終